雑感・出雲神話と出雲の国（２）

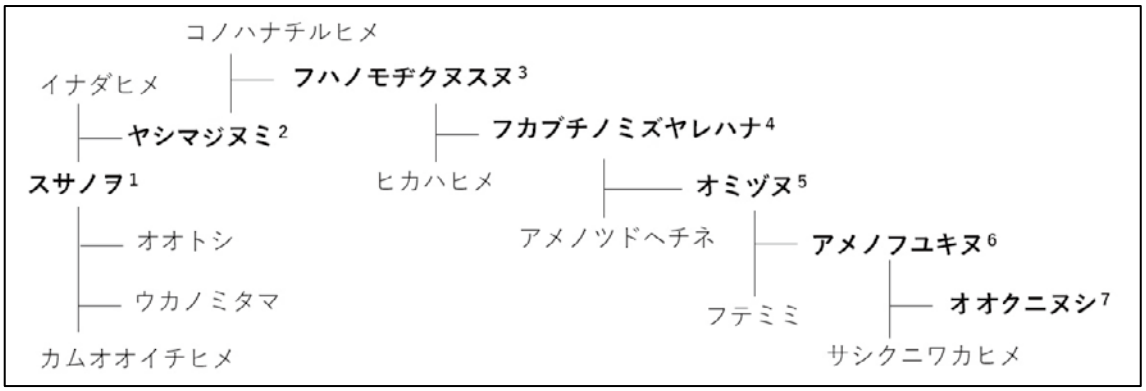
～大国主伝説（Ⅰ）成長時代～

荒井 優（Masaru ARAI）

鳥取看護大学 学長

１．系図に見る大国主

スサノヲの末裔　『古事記』によれば、大国主は、出雲の王スサノヲから数えて７代目の子孫となっている[1)]。また、『日本書紀』の本文では、大国主はスサノヲが稲田姫とのあいだに生んだ嫡子だとしているが、別伝では『古事記』と同じく、稲田姫に生ませた御子の５代目の孫だと伝えている[2)]。



スサノヲから大国主までの系図（『古事記』による[3)]）

スサノヲの嫡子・ヤシマジヌミ（八島士奴美）は、「八岐大蛇」退治の後に須我（須我神社、島根県雲南市大東町須賀）でスサノヲが稲田姫を娶って産んだ第１子である。

３代目のフハノモヂクヌスヌ（布波能母遅久奴須奴）、４代目のフカブチノミズヤレハナ（深淵之水夜礼花神）については不明である。

５代目のオミヅヌ（淤美豆奴）は、『出雲国風土記』に「国引き」を行った出雲国づくりの巨神として登場する[4)]。――オミヅヌは、遠くにある朝鮮半島の「志羅紀」（しらぎ、新羅）、「北門佐伎」（きたどさき、隠岐島前）、「北門良波」（きたどよなみ、隠岐島後）、能登半島の「高志」（こし、越）から、それぞれ余った土地を引き寄せてもって来た。その土地が「島根半島」（杵築（きづき）の岬・狭田（さだ）・闇見（くらみ）・美保（みほ）の岬）であるという。他国の領地を引いて来て出雲の国を作ったという「国引き」説話は、いったい何を言わんとするものなのか？　素直に耳を傾ければ、それらの国を平定した、あるいは平定しないまでも同盟関係を結んだということではないだろうか[5)]。

上の系図によれば、オオクニヌシの祖父はオミヅヌ、父はアメノフユキヌとされている。

大国主の父　大国主の父アメノフユキヌ（天之冬衣）は、日本書紀ではアメノフキネ（天之葺根）と表記されている[6)]。「八岐大蛇」退治により、スサノヲはオロチの遺骸から鉄剣「天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）」（後の「草薙剣（くさなぎのつるぎ）」）を得た。天之葺根は、スサノヲの指令によって、その剣を天照大神のもとへ献上した人物であると、『日本書紀』は記している。おそらく、

天之冬衣はスサノヲのオロチ退治に加わった遊撃隊のリーダー的存在だったのではないか。そうだとすれば、スサノヲと大国主の父天之冬衣は、いずれも同時代に生きた命（みこと）たちだということになる。さらに言えば、『古事記』では、大国主は直接にスサノヲに会い、その愛娘スセリ姫と結婚（駆け落ち）しているのだから、（出雲神話のストーリーからして）大国主もまたスサノヲと同時代に生きた命だということになっている。

大国主の父についてさらに調べれば、石川県輪島市の重蔵神社に天之冬衣命が祀られている。その由緒には、天之冬衣は出雲から能登へ来臨し、同地を平定した[7]と記されている。やはり、天之冬衣は勇猛果敢な武将だったのであろう。

天之冬衣の息子大国主　その息子の大国主は、残念ながら武術・軍事に秀でた若者ではなかった。各地域に「稲種」を配り農業指導したとか（多根神社[8]）、田畑を荒らす害虫の駆除方法を指導したとか（虫野神社[9]）、山の麓にため池を作って田畑を開拓したとか（佐比売山神社[10]）、あるいは病人への医療アドバイスを行う（白兎神社）といった、知恵において抜きん出た研究肌の人物であったようである。

２.「大国主」の名前

「大国主」の別名　ところで「大国主」という名前は役職名であって、天之冬衣の息子の実名ではない。『古事記』によれば、大国主には４つの別名があるという。「大穴牟遅（おおなむぢ）」、「葦原色許男（あしはらしこを）」、「八千矛（やちほこ）」、「宇都志国玉（うつしくにたま）」。『日本書紀』では、「大己貴（おおなむち）」「大国玉（おおくにたま）」「顕国玉（うつしくにたま）」といわれる。『出雲国風土記』では「大穴持（おおなむち）」「所造天下大神（あめのしたつくらししおおかみ）」、『播磨国風土記』では、「大汝（おおなむち）」「葦原志挙乎（あしはらしこを）」「伊和大神（いわおおかみ）」と称されている。

「大国主」いう名前は、『古事記』でのみ使われている尊称であることに注意しておく必要がある。『古事記』では、終始「大国主」の名が使われている。しかし、『古事記』以外の他の書には、いずれにも「大国主」の名は出てこない。他の書に共通しているのは「所造天下大神オオナムチ（ヂ）」である。書によって、オオナムチの漢字を「大己貴」としたり「大穴持」としたり「大汝」としたりするが、いずれも正式には「所造天下大神（あめのしたつくらししおおかみ）オオナムチ（ヂ）」である。

「大国主」と「大穴牟遅」　『古事記』だけが「大国主」の名を使う。しかもこの名は、スサノヲから王位を継ぎ、末娘スセリ姫との結婚を許された時に、はじめて出雲の王スサノヲから与えられた名前である。

それ以前の大国主は、まだ「大国主」ではなく、「大穴牟遅」の名でもって語られている。たとえば、「因幡の白うさぎ」の物語では、「兎が痛み苦しんで泣き伏していると、神々の最後について来た大穴牟遅神が、その兎を見て、『どういうわけで、お前は泣き伏しているのか』と尋ねた」とあるように、大国主ではなく、「大穴牟遅」の物語として語られている。

兄弟の八十神（やそがみ）たちから命を奪われ、母親がカミムスビの神に懇願して、治療・蘇生させた時も、「大穴牟遅」であって「大国主」ではない。八十神たちから逃れて、「根の堅州国（ねのかたすくに）」にいるスサノヲのもとへ逃げ込み、そこではじめてスセリ姫に会った時も、彼はスサノヲによって「葦原色許男（アシハラシコヲ）」と称された。

若き大穴牟遅はスサノヲからさまざまな試練といじめを受けるのだが、そのたびにスサノヲの娘スセリ姫に救われ、結局スセリ姫と手に手をとって駆け落ちするようにスサノヲから逃げていく。その大穴牟遅に投げかけた祝福の言葉が以下の言葉だ。

「お前が持っているその生太刀（いくたち）、生弓矢（いくゆみや）で、お前の腹違いの兄弟を……川の瀬に追い払って、貴様が大国主となって、わが娘スセリ姫を正妻とし、宇迦（うか）の山の麓に

太い宮柱を立て、天高く千木をかかげて宮殿に住め！　こやつよ。」[11)]

この時から、大穴牟遅は「大国主」として物語られる。「大国主」とは、文字どおり、大いなる国の主という意味である。

「大国主」の別名の多さ　大国主には、なぜ別名が多くあるのか？　「大国主」について、あるいは「出雲神話」について述べようとする時に、かならずその説明が求められる。これまでの定説によれば、それは（大和朝廷に組しなかった）多くの国々の首長の集合的人格であると説明される[12)]。

しかし、私はそのような観点から「大国主」を理解しようとは考えていない。あくまでも、「大国主」は一人の大いなる出雲の王だった、あるいは「葦原中国（あしはらのなかつくに）」を束ねる偉大な王だったという前提に立っている。それは仮説であるが、この仮説にもとづいて「大国主」像の構築を行おうとしている。そして、「大国主」像の構築をとおして、さらに「出雲国」像の構築をめざしている。

それならば、大国主は、一人の王として、なぜ多くの別名をもっているのか？　彼は、出雲国では（文字の違いはあるが）一貫して「オオナムチ（ヂ）」である。播磨国では、「オオナムチ」または「葦原志挙乎（アシハラシコヲ）」と呼ばれ、また（伊和の地を国土開拓した神として）「伊和大神（イワオオカミ）」とも尊称された。そして、他国の王女を娶って同盟関係を結ぶ時には、「八千矛（ヤチホコ）」と呼ばれる。他国へ出陣し、国土平定し、その行った先々で、「支配者」としての呼ばれ方が異なるのだということがわかる[13)]。開拓し統治した国の多さが、異なる名前の多さにつながったのである。

なお、大国主のもう一つの別名とされているのが、大和の三輪山に祀られている「大物主（おおものぬし）」である。「大物主」は大国主とは別神であると私は考えているが、ここでは触れないことにする[14)]。

３．大国主の人生行程

大国主の３つの人生段階　大国主の人生行程を、若い青年時代から最後の「国譲り」の時期まで、大きな流れの形で物語っているのが、『古事記』の出雲神話の後半部分である。他の書、たとえば『日本書紀』にも『出雲国風土記』にも、大国主の断片的な言動が記されているが、『古事記』のみが大国主について、その青年時代から最後の「国譲り」までの一連の流れを、連段的に物語っているのである。それゆえ、まず『古事記』を中心にすえて、大国主の人生の軌跡をたどってみようと思う。

『古事記』によれば、大国主の人生は大きく３つの段階に分けることができる。

（１）因幡の八上姫やスサノヲの娘スセリ姫と出会い、試練を乗り越えながら成長していく、青年オオナムヂの成長時代。

（２）出雲の王になって周辺諸国を平定し、「葦原中国」を築いていく、大国主の国づくり時代。

（３）「高天原」族から「葦原中国」の国譲りを迫られ征服された、大国主の国譲り時代。

この３つの段階を大国主の人生行路の大きな流れにすえて、彼の軌跡をたどってみることにしよう。私たちは、まず『古事記』をもとにして、それに加えて補足的に『日本書紀』や『出雲国風土記』、あるいは『播磨国風土記』など、さらには各所の神社伝承に残された大国主の足跡をつなぎ合わせながら、大国主の行動を追ってみようと思う。ただし、この探求はあくまでも、『古事記』『日本書紀』『出雲国風土記』『播磨国風土記』、あるいは各地の神社伝承など、与えられた限られた資料を前提として、仮想的に作り上げたイメージである。もちろん、できれば歴史的な史実に迫るイメージでありたいが、私たちがここで構築したイメージが史実的に正しいことを主張するものではないことをお断りしておく。あくまでも、与えられた限られた資料にもとづいて、どのような大国主像が生まれてくるのかという実験的な追求に徹している。

４．青年オオナムヂの成長時代

（１）オオナムヂの出生地はどこか？

オオナムヂがどこで生まれたかはわかっていない。どこで、どのように亡くなったのかもわかって

いない。（『古事記』の系図にあるように）父が天之冬衣、祖父が淤美豆奴であるとすれば、出雲王家の一子として生まれたことになる。そうであれば、やはり出自は出雲であろう。

父あるいは祖父の痕跡をしめす神社はないかと探してみたら、あった。淤美豆奴と天之冬衣の二人を祀る「富（とび）神社」[15]が、神門水海（かんどのみずうみ、現在の神西湖）に近い富村（とびむら）（出雲市斐川町富村）にある。天之冬衣は、島根県内では、ここ以外には祀られていない。社伝には、淤美豆奴が「国引き」を終えた後にこの地へ鎮座したとある。オオナムヂも、（『古事記』の系図を信用して、淤美豆奴の孫であればだが）、この富村に生まれたと推測するのが順当であるように思う。出雲王朝は、スサノヲが東と西に２つの政庁をおいていたように、東部の意宇（おう）氏と西部の神門（かんど）氏の２つの勢力があった。オオナムヂはおそらく出雲国西部の出身だったのであろう[16]。

（2）「因幡の白うさぎ」

『古事記』に出てくる青年オオナムヂの最初の物語は、よく知られている「因幡の白うさぎ」[17]である。簡単に要約しておこう。

あらすじ　隠岐の島にいたウサギが、本土へ渡りたくてワニ（山陰地方ではサメのことを「ワニ」という）を騙そうとした。「私とお前たちとどちらの数が多いか比べてみないか？」島から気多の岬（因幡の海岸）まで一列に並んだワニの上を、ウサギは数えながら渡って行った。最後に渡り終えようとした時に、「お前たちは騙されたのだよ」とつい口を滑らせたがために、一番端にいたワニがウサギを捕らえてその衣を剥いで丸裸にしてしまった。

そこをオオナムヂの兄弟神（八十神）たちが通りかかった。因幡の国にいる美しい八上姫をものにするために会いに行く途中だった彼らは、痛くて泣いているウサギにこう助言してやった。「海水を浴びて風にあたって寝ておれ。」ウサギはその通りにすると、身体は傷だらけになってしまった。

八十神たちの荷物を背負って遅れてやって来たオオナムヂが、傷だらけのウサギを見て、こう助言した。「真水で身体を洗って、蒲の花粉をとってまき散らしその上に寝ころがっていなさい。そうすれば元の肌に治るだろう。」ウサギはその通りにしたら、元通りの身体になった。そこで、ウサギはオオナムヂに告げた。「八上姫を娶るのは、あの八十神たちではなく、あなた様です。」ウサギが告げた通り、八上姫が選んだのは、横暴な八十神たちではなく、優しい慈愛にみちた知恵者のオオナムヂだった。

動物競争譚　この「因幡の白うさぎ」の寓話は、しばしば動物競争譚として説明される[18]。知恵のある陸の動物が愚かな水（海・川）の動物を騙す動物寓意は、インドネシアから北東アジアにまで、各地に伝わっている。うさぎと亀、猿と蟹、……。この動物競争譚を利用して、若きオオナムヂが慈愛に満ちた人柄、医療の術をもつ知恵者であること、民衆から尊敬される人物であることを物語るのが、この「因幡の白うさぎ」の目的である。そのように説明されることが多い。それは、それで、『古事記』が「因幡の白うさぎ」の寓話を取り入れた趣旨をうまく説明することができる。

しかし、「因幡の白うさぎ」には、もっと深い歴史的な関連があることを証言する書物がある。宇佐公康『古伝が語る古代史～宇佐家伝承』[19]。昔から宇佐神宮の宇佐家に伝わる「口伝」である

ワニ族　その伝承によれば、ワニ（和邇）族はワニ神を祀る朝鮮渡来系の海人（あま）族で、後期旧石器時代に朝鮮半島から日本列島へ渡来した種族だとされている。「ワニ舟」という、人を食うワニザメに似た丸木舟を操って、漁労・採集生活を営んでいた。ワニ族は日本海に面して栄え、壱岐・対馬から山陰地方に進出し、やがて先住民であった出雲族の勢力下に支配されながら、さらに近畿・東海地方にまで進出し、土地を開拓していった[20]。

ウサ族　一方のウサ（菟狭）族は月神（月読尊ツキヨミノミコト）を祀り、月の暦（月読）を天職とする古代氏族である。月にはウサギが住んでいるという石器時代からの信仰ゆえに、ウサギ神を崇拝する氏族として、ウサ族と称していた。ウサ族は、石器時代から隠岐の島に住みついていて、漁労・採集生活を営んでいた[21]。

ウサ族とワニ族の争い　折しも、稲作による農耕時代になって、ウサ族は本土に土地を求めてワニ族と土地取引を行った。しかし、結局その取引に失敗したウサ族は全財産を失って丸裸になってしまった。そこを通りかかったオオナムヂがウサ族にこう助言した。「隠岐の島に残る全財産をワニ族にやってしまって、ウサ族にふさわしい新しい土地を本土に求めて、再起をはかりなさい。」こうしてオオナムヂの勧めにしたがって、ウサ族は隠岐の島を去って、オオナムヂから与えられた八上（現在の八頭）の地に移住し、この地を開拓した。オオナムヂはウサ族の姫ヤガミヒメ（八上姫）を娶り、一子をもうけた。その後、ウサ族は八上を拠点にして、山陽・北九州にまで勢力を広げ、繁栄していった[22)]。

「因幡の白うさぎ」は、このような歴史的経済的な出来事を背景にして生まれてきた物語なのだと理解すると、現代の私たちにもひじょうに納得できる、奥行きのある物語に生まれ変わる。

（3）八上姫とオオナムヂ

八上姫との結婚　この「因幡の白うさぎ」で注目したいのは、出雲の八十神とともにオオナムヂが因幡の国の八上姫に会いに行き、求婚したという事例である。この時、姫が婿に選んだのは、一番慈愛の深い、しかし一番格の低いオオナムヂだった。オオナムヂが因幡の国の姫と結婚したことによって、因幡の国は出雲の国の支配下に入った。そして、まだ出雲の国の王となっていないオオナムヂは、この因幡の国でしばらくの間は八上姫とともに住んでいたのであろう。

賣沼神社　八頭町の隣にある河原町には、八上姫を祀る賣沼（めぬま）神社がある。もとは「比賣沼（ひめぬま）」神社と呼ばれていたという。由緒によれば、「漂着した外地の舟人たちが千代川をさかのぼって、この曳田郷を開いた……」[23)]とある。八上の開拓民は、もとは日本海から漂着した舟人たちだったという。隠岐の島から移住してきたウサ族を暗示させる由緒である。対岸の山麓には「獄古墳（だけこふん）」があり、地元の人たちは八上姫の墓として大切に守っている。神社から北４km のところに「倭文（しとり）」という地名があり、オオナムヂが恋文を書いた場所といわれている。北２km には「袋河原」があり、オオナムヂが担いでいた布袋を捨てた場所とされている。また北 3.5km には「円通寺（えんつうじ）」という地名（寺の名前ではない）があり、二人が結婚した場所で、それゆえに「縁を通じた路（縁通路）」と伝えられている[24)]。

（4）オオナムヂの受難

「因幡の白うさぎ」の物語に引き続いて、『古事記』は「八十神の迫害」[25)]について語っている。

「八十神の迫害」　八上姫が選んだ結婚相手が事もあろうに一番格下のオオナムヂだったことに怒り逆恨みした兄弟の八十神たちは、若いオオナムヂを執拗に殺そうとした。まず、伯耆国の手間山（てまやま）の麓にオオナムヂを連れ出して、「赤猪」と称して真っ赤に焼いた石を山上から落としてオオナムヂに受けとめさせて殺そうとした。さらには、山へ誘い出し、裂いた木に罠を仕掛けてオオナムヂを挟みつぶそうとした。しかし、母神サシクニワカヒメ（刺国若姫）の必死の介抱によって、オオナムヂは蘇り九死に一生を得た。

赤猪岩神社　伯耆国の「手間山」は、現在は鳥取県米子市の南に位置する南部町（旧会見町）の「手間要害山」に比定され、その北麓に「赤猪岩（あかいいわ）神社」がある[26)]。オオナムヂが八十神たちから受難にあった現場と言い伝えられ、境内にはオオナムヂが大火傷を負ったとされる巨大岩が封印されている[27)]。

（5）出雲国と木国（紀伊国）

「木国」へ逃れるオオナムヂ　その後、息子の身を案じた母神の刺国若姫は、オオナムヂを「木の国」の大屋彦のもとへ逃がした。しかし、八十神たちは木の国にまでオオナムヂを追いかけ、大屋彦に引き渡しを求めた。そこで、大屋彦はオオナムヂを「根の堅州国」にいるスサノヲのもとへ逃がした[28)]。これが『古事記』に描かれた物語のおおまかな流れである。

ここで注目したいのは、場所の移動である。

オオナムヂは、伯耆国の手間山で迫害され、大屋彦がいる木の国へ逃れていった。八十神たちも、オオナムヂを追って手間山から木の国へ追って行った。

いったい、『古事記』で語られている「木の国」とは、どこにある国のことをいうのであろうか？

「木国」『古事記』に登場する「木国」は、定説として「紀伊国」（現在の和歌山県）に比定されている。『日本書紀』では一貫して「紀伊国」の文字が使われていて、「木国」は使われていない。逆に、『古事記』では「紀伊国」は使われず、一貫して「木国」が「紀伊国」と同じ意味で使われている。「木国」は「紀伊国」とは別の国であるという解釈があるが、『古事記』と『日本書記』を読み比べるかぎり、「木国」と「紀伊国」は同一の国だと解釈するのが妥当だと私は判断する。

オオナムヂが頼って行った大屋彦は、「木国」すなわち「紀伊国」にいたのである。それでは、オオナムヂはいったいなぜ大屋彦のところへ行ったのか？　『古事記』はその説明についてなにも語っていない。また、「大屋彦」とはどういう人物なのか？　とりわけオオナムヂと、どのような関係の人物なのか？

大屋彦＝五十猛　『古事記』では「木国」に「大屋彦」がいると記されるが、『日本書紀』では「紀伊国」に「五十猛」がいるとされている。

五十猛については、拙論「雑感・出雲神話と出雲の国（１）」において、「スサノヲ親子の植林事業」[29]について取り上げた。ここでもう一度、『日本書紀』に登場する五十猛の事跡について簡単に振り返っておこう。

スサノヲはその子イタケル（五十猛）を率いて朝鮮半島の新羅へ行ったが、この国にはいたくないと言って、多くの樹種を日本へ持ち帰り、「筑紫からはじめて大八洲の国中に播きふやして、全部青山にしてしまわれた」[30]。最後に、五十猛と二人の妹、大屋津姫と抓津姫は、紀伊国にたどり着いて、伊太祁曽（現在の和歌山市）に拠点をおいて、植林し国土開拓したという。そしてその後、スサノヲは「熊成峯（くまなりのたけ）」へ行って、ついに「根の国」に入った[31]。

ところで、五十猛と二人の妹が最後にたどり着いた地に「伊太祁曽神社」がある。その祭神は、「五十猛命（亦名―大屋毘古神）」[32]と記されている。ここに「亦名」とあるように、大屋彦は「五十猛」の別名であり、同一人物であるとされている。『古事記伝』を著した本居宣長も、「大屋毘古神は五十猛神と一ツなるべし」[33]と断定しており、大屋彦はスサノヲの息子、五十猛と同一人とみなしてよいであろう。大屋彦すなわち五十猛は、国土開拓のために、二人の妹とともに紀伊国にいたのである。

出雲と紀伊　そこへ、オオナムヂが出雲と因幡の国境にある手間山からやって来た。出雲から紀伊へと、オオナムヂはあたかも隣の国へ行くかのような様子で、いともたやすく移動している。それは、現代の私たちの地理的感覚からして、ひじょうに不思議な移動である。出雲から紀伊へ、あるいは紀伊から出雲への移動は、あたかも神話（ファンタジー）的な異界の通路があるかのような描き方である。神話的に受けとればよいのかもしれない。

それにしても、出雲と紀伊とのあいだには、出雲族（スサノヲ一族）による国土開拓という点からして、ひじょうに深い関係にあったようである。たとえば、出雲の熊野大社と紀伊の熊野神社、この二つは名称だけではない、人的な繋がりがあったのではないだろうか。

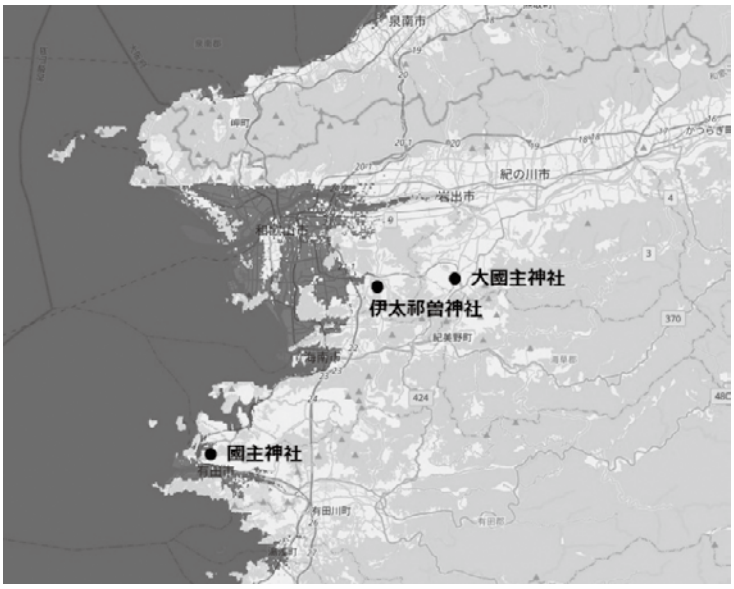
オオナムヂの紀伊への移動もまた、実は紀伊の国土開拓が目的だったのではないかと、私は推測している。オオナムヂは、八十神たちから逃れるためなどではなく、次代の王になる修行を積むために紀伊国へ行ったのではないだろうか。その痕跡が現地の神社伝承に残っている。

紀伊開拓　伊太祁曽神社から南西に約 20km ほど行った有田市に国主（くぬす）神社があり、大国主が祀られている。由緒には、「附近の田畑は、大國主の開拓された由緒ある遺蹟と察せられる」[34]とある。また、伊太祁曽神社から約８km ほど東に大國主神社があり、その由緒には「大国主命が当地を訪れたことを由緒として祀った」[35]とある。「大国主」の名が地名、「紀ノ川市貴志川町国主」に残されている。若きオオナムヂは、紀伊国で開拓していた五十猛を頼って、この地に逃れてきた。そして、五十猛の指導のもとに紀南沿岸の開拓団に加わったのである。

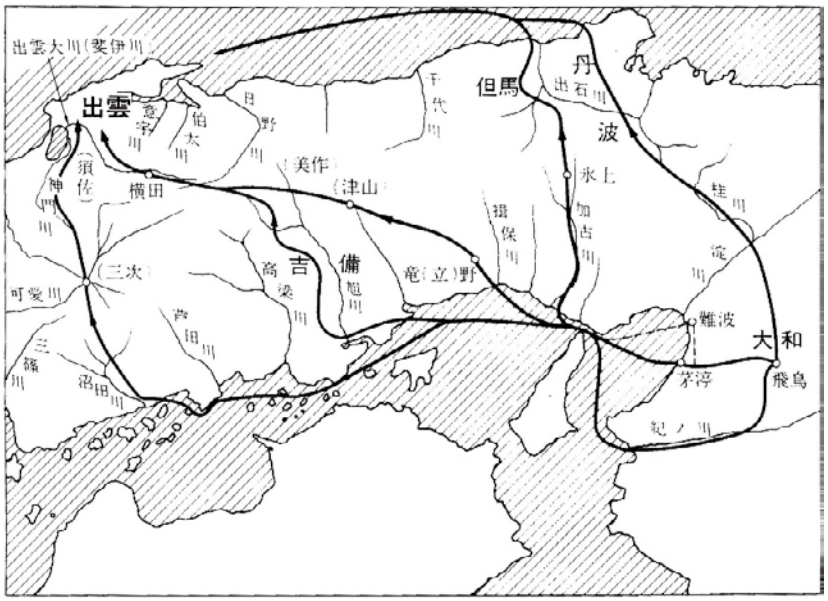
出雲から紀伊へ　それにしても、出雲から紀伊へ、オオナムヂはどのようなルートをとって行ったのであろうか？まだ日本には馬という乗りものがなかった時代に、弥生時代の出雲の人たちはどのように紀伊へ行ったのか？

門脇禎二『出雲の古代史』は、記紀、風土記の叙述にもとづいて、大和と出雲を結ぶルートをいくつか想定している[37]。

①大和―京都（桂川）―丹波―日本海―出雲ルート
②大和―加古川―但馬―日本海―出雲ルート
③大和―播磨（竜野）―津山―横田―出雲ルート
④大和―吉備―旭川または高梁川―横田―出雲ルート
⑤大和―備後（沼田川）―三次―神門道―出雲ルート



紀伊の開拓地（弥生時代を想定）
（「Flood maps」[36]により海抜５m に設定）

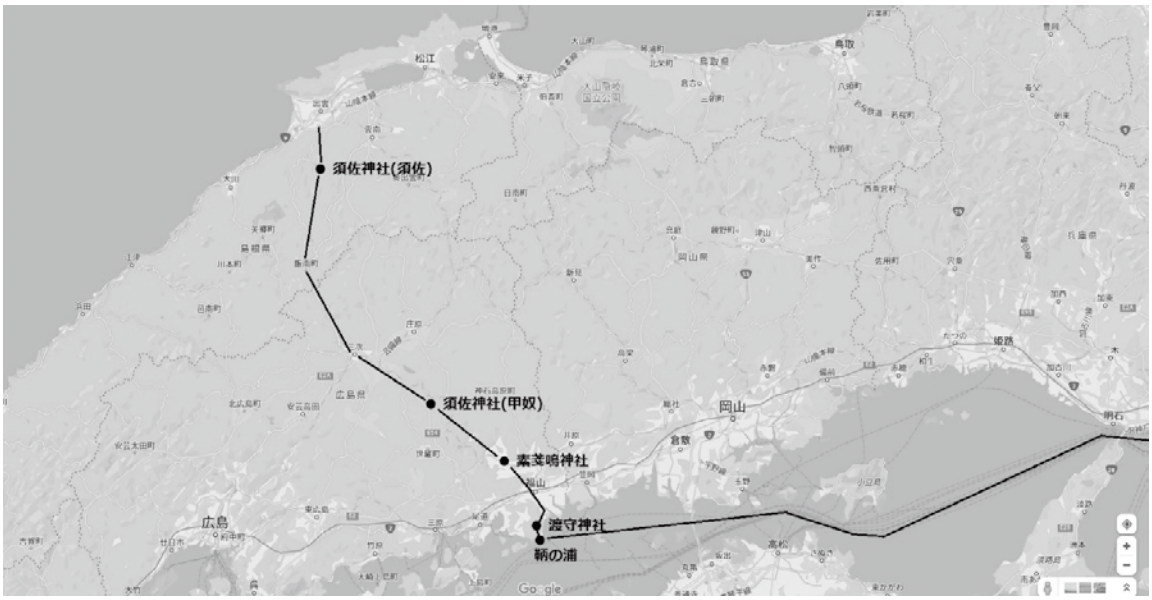


門脇禎二『出雲の古代史』(ＮＨＫブックス) より

このうちルート③は大国主の播磨平定によって開拓された街道（いわゆる「出雲街道」）と考えられる。それ以前のスサノヲ・オオナムヂの時代に利用されたルートとして、ルート⑤に着目してみたい。実は、このルート上にスサノヲ・オオナムヂ時代の伝承が残っているからである。

広島県福山市鞆町後地に渡守神社（わたすじんじゃ、現在は沼名前神社（ぬなくまじんじゃ））がある。伝承によれば、「スサノヲが南海（紀伊国）に渡る時にここへ鞆（とも＝矢を射る時に左腕につける防具）を落とした」から「鞆の浦」の地名が生まれたという。「素戔嗚尊は戸手（とで、素盞嗚神社）で一泊した後、ここでも一泊したとされ、その時に宿を貸したというしふかきという者の子孫という「渋柿屋（志ぶがき屋）」の者が、神官の一人として祇園祭において重要な役割を果たしていた」[38]とある。

渡守神社は芦田川の河口付近にあり、その北北西約 20km のところに素盞嗚神社（福山市新市町戸手）がある。往古、スサノヲが戸手で一泊し、翌日には鞆の浦でまた一泊して、その翌日に瀬戸内海へ船出して南海（紀伊国）に向かったという記事である。鞆の浦は瀬戸内海に面した港で、大和や紀伊へ向かう出港地だったのである。



スサノヲが出雲～紀伊国の移動に利用したと推定されるルート（「Google map」を利用）

スサノヲが出雲から紀伊へ渡ったルートは、この記事からして、備後（広島県）の芦田川から瀬戸内海を通って紀伊へ抜けるルートであったことがわかる。

もう一つ、スサノヲが旅の途中に休憩したという伝承がある。現在の広島県三次市甲奴（こうぬ）町小童（ひち）に須佐神社があり、スサノヲにちなんだ「矢野の神儀」という古くからの祭礼が今も行われている。小童から東南東約５km の隣村に矢野（府中市上下町矢野）があり、そこの住民がこぞって参加する祭礼である。その由緒は、「往古、素神（スサノヲ）は矢野を御通行され、しばし茶屋にて御休息、そばの泉の水（祇園水）を飲まれ、多くの里人の見送りを得て小童村へ入村なさった故事に起因する」[39]とある。

スサノヲは、紀伊からの帰りであろうか、上に紹介した港「鞆の浦」から北西に約 60km 上った甲奴村で休憩し、さらに北西約 30km 上って三次へ向かったことが推測される。

以上、スサノヲの２つの伝承から、弥生時代当時（スサノヲ・オオナムヂ時代）の出雲の人たちは、出雲から神門道を南下して、須佐を通り、三次を南東へ下り、旭田川を下って、鞆の浦に出て、ここから舟で瀬戸内海を渡り、明石海峡を通り抜けて、紀ノ川（紀伊）へ行った、というルートだったと考えてよいであろう。もちろん、推測の域を出ないが。

（6）「根の国」（「根の堅州国」）訪問

あらすじ　紀伊の国で国土開拓に専念していたオオナムヂは、ほどなく（おそらく１年か２年ほど経った頃であろうか）大屋彦に言われるままに、「木の俣（根と根のあいだ）をくぐって、スサノヲのおられる根の堅州国へ行った」[40]と『古事記』は物語っている。

オオナムヂが、スサノヲの住んでおられる宮に行くと、末娘スセリ姫が出てきた。スセリ姫はオオナムヂをひと目見て、すぐさま心を許して、彼と結び合われた。そうして、スセリ姫は、「とても麗しい神がお出でになりました」と、父スサノヲにオオナムヂを引き合わせた。スサノヲはその若者を見るなり、「これは葦原醜男というやつよ」と言って、宮へ呼び入れた[41]。

以上が、オオナムヂが「根の堅州国」にいるスサノヲを訪問した場面の前段である。

「根の堅州国」　ここで問題なのは、スサノヲが住むという「根の堅州国」あるいは「根の国」とはいったいどこなのかである[42]。この問題は、今でも続いている議論である。

「根の堅州国」＝「紀伊国」という説もあるが、私はその説をとらない。晩年のスサノヲは紀伊ではなく出雲にいたと、私は考えている。

キーポイントは、スサノヲが亡くなる前の最晩年に住んでいたとされる「熊成峯（くまなりのたけ）」とはどこにあるかである。

『日本書紀』によれば、スサノヲは息子の五十猛とともに紀伊の国に渡り、その後スサノヲは（五十猛と別れて）「熊成峯」に転居したとある。そしてその後、スサノヲは「ついに根の国にお入りになった」、つまりお亡くなりになったと、『日本書紀』は語っている[43]。亡くなる前にいたという「熊成峯」はどこにあるのかである。

「熊成峯」「熊成峯」は紀伊の国（具体的には熊野）にあるという説[44]と、やはり出雲の国のどこかという説がある。私は、拙論「雑感・出雲神話と出雲の国（１）」において、「熊成峯」は出雲の宇迦山にあると比定した[45]。

宇迦山の南麓に「来阪（くるさか）神社」があり、スサノヲがそこから出雲を眼下に眺めたという「御腰掛岩」がある。その由緒には、「宇迦山の主峰鼻高山は、古来熊成峰と称している」[46]と記されてある。鼻高山は来阪神社から北へ１kmほど上ったところにある。また、来阪神社から西へ７kmほど行くと、現在の出雲大社（杵築大社）がある。「熊成峯」は、出雲の北山、宇迦山の一角にある小高い山頂とするのが妥当だと、私は考えている。

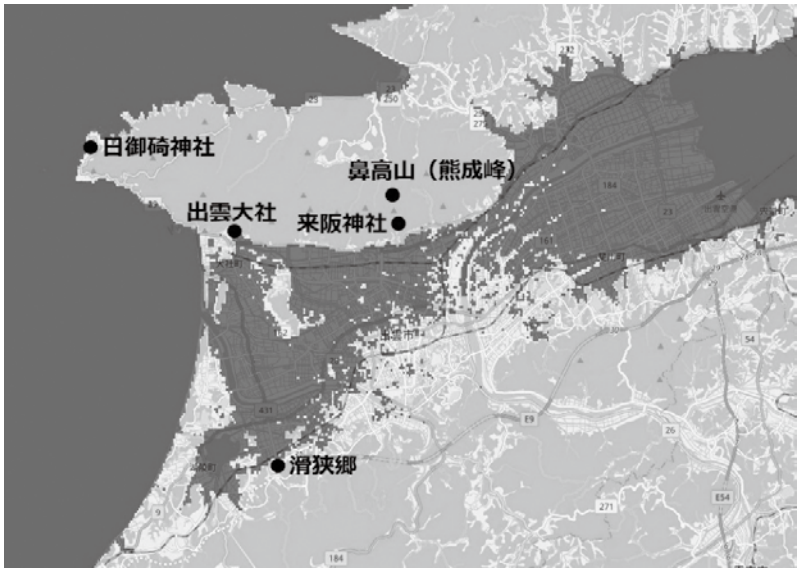
また鼻高山から西へ約10kmのところに「日御碕（ひのみさき）神社」がある。その由緒によれば、スサノヲが熊成峯から柏の葉を投げて、「吾が神魂はこの柏葉の止まる所に住まん」と占ったところ、柏の葉は「隠ヶ丘」に止まったという。そこで、スサノヲが崩御した後、五世の孫（オオナムヂの父）天葺根（『古事記』では天之冬衣）が御魂をその地に祀った。それが日御碕神社の「神の宮」であると伝えられている[47]。

スサノヲは晩年には出雲の宇迦山にある「熊成峯」と呼ばれるあたりに宮をおいていたと、私は推測している。スセリ姫は、スサノヲとともにその宮に住んでいたのかもしれない。あるいは、『出雲風土記』が言うように、若きスセリ姫は滑狭郷（なめさごう）に住んでいて、時々スサノヲの宮へ立ち寄ることがあったのかもしれない。滑狭は宇迦山の鼻高山（熊成峯）から南西へ約10kmのところにある。舟で通ったのではないだろうか。通えない距離ではないと思う。

オオナムヂの試練と「大国主」　スセリ姫の婿となったオオナムヂは、しかしスサノヲからさまざまな試練を受けた[48]。

１日目は蛇のいる室へ、２日目はムカデと蜂のいる室に入れられたが、いずれの時もスセリ姫から渡されたお呪いのヒレのおかげで、オオナムヂは無事に眠ることができた。そして３日目は野原に射こまれた鏑矢（かぶらや（音の鳴る矢））を探しに行かされた。スサノヲは、オオナムヂの入った野原へ火を放ち、野原を火で焼き払った。火に囲まれたオオナムヂは、しかしネズミに助けられ、地面の穴に隠れて危うく難を逃れた。

矢を持って戻ったオオナムヂを、スサノヲは家の大室屋に招き入れた。次にスサノヲは、オオナムヂに頭のシラミを取れと命じた。見れば、それはシラミではなくムカデだった。とっさにスセリ姫から黒い椋の実と赤土を渡されたオオナムヂは、椋の実をか



出雲（弥生時代を想定）（「Flood maps」により海抜５ｍに設定）

み砕き赤土を含んで吐き出した。スサノヲは、ムカデをかみ潰していると思い込み、「けなげな奴だ」と安心して、そのまま寝入ってしまった。

オオナムヂは、寝入っているスサノヲの髪を束ねて室屋の垂木ごとに結びつけ、妻のスセリ姫を背負って、スサノヲの生太刀と生弓矢と天詔琴（あまののりごと）を持って逃げて行った。

目を覚ましたスサノヲは、オナムヂとスセリ姫がはるか遠くに逃げ失せるのを見て、大声で叫んだ。「おまえが持っているその生太刀と生弓矢で八十神を打ち払い、貴様が大国主となって、わが娘スセリ姫を正妻とし、宇迦の山の麓に太い宮柱を立て、天高く千木をかかげて宮殿に住め！　こやつよ。」

こうして、オオナムヂはスセリ姫とともに「駆け落ち」のようにスサノヲのもとを去り、スサノヲから出雲の王位を継いだ。この時、スサノヲはオオナムヂに４つのことを命じた。

①スサノヲの生太刀と生弓矢で八十神を打ち払うこと。
②「大国主」を名のること。
③末娘スセリ姫を正妻としスサノヲの王位を継ぐこと。（出雲は末子相続だった。）
④宇迦山の麓に杵築の宮（出雲大社）を建てること。

（7）八十神の討伐

スサノヲから命じられた第１の指令は、出雲国内に割拠する兄弟神たちの討伐だった。これを成し遂げた時に、青年オオナムヂは「大国主」となり、スセリ姫との結婚が正式に認められる。

『古事記』にストーリー化された、オオナムヂの「八十神討伐」は、どうやら実際に史実として遂行されたようで、その史跡が各地に残されている。

城名樋山　『出雲国風土記』には、オオナムヂによる八十神の討伐を説く記事がある。「大原郡」の条に「城名樋山」についての記事がある。「所造天下大神（あめのしたつくらししおおかみ）大穴持命が、八十神を討とうとして、城を作った。だから城名樋（きなび）という。」[49]

島根県雲南市木次町の南方に標高 120m の城名樋山がある。現在は「妙見山」と呼ばれている。オオナムヂが八十神を討つために城名樋山に城を築いたという。現在は公園化され、眼下の南には木次の、西には三刀屋の町並みが広がっている。

來次神社　城名樋山から南へ６km のところに來次（きすき）神社（現在は木次神社）がある。由緒には、「大穴持命が国土経営にあたらせられたみぎり、『八十神は青垣山のうちに置かじ』とおおせになって、追い払われた時、『治次（きすき＝追いつき）』なさった云々」[50]とある。オオナムヂが敵対する八十神たちをこの地で討伐（治次）した。出雲の「青垣山」から追い払った。だから、この地は「きすき」というのだと言う。「因幡の白うさぎ」に始まる八十神たちとの因縁は、ここで終止符が打たれたのである。

その近隣には、ほかにも戦いの跡を示す地名が残っている。

八十神討伐に関係する地域

宇能遅神社　城名樋山（妙見山）から南へ約４km のところに宇能遅（うのち）神社がある。由緒によれば、「往古は祭事も多く、弓掛松として老樹があった。古老の言い伝え

によれば、この地、「屋裏郷（やうちのさと）」は『出雲国風土記』にあるとおり、天下造りし大神（オオナムヂ）が矢を射立てさせた処であり、それゆえに「矢内」といわれる。その後（神亀３年（西暦726年））、矢内は「屋裏」に改められた[51]という。この地にりっぱな松があり、オオナムヂはこの松に矢を掛けて、八十神たちを攻めた[52]、ということである。現在、往古の屋裏村は大原郡加茂町に、さらに雲南市加茂町に編入されている。

屋代神社　宇能遅神社のすぐ南、赤川を挟んだ対岸に屋代（やしろ）神社（現在は加茂神社）がある。この地、「屋代」はもとは「矢代」の字だった。『出雲国風土記』には、八十神たちと戦うために、「垈（あむつち＝盛り土）を立てて矢を射られた処である。だから矢代という」[53]とある。

現在の雲南市木次町と加茂町のあたりで、オオナムヂと八十神たちとの合戦があったことが、『出雲国風土記』から推察される。この合戦で、オオナムヂは八十神たちを討伐し、西隣の三刀屋を根拠地として出雲の統治を始めた。

三屋神社　妙見山から南西へ約４kmのところに、三屋（みとや）神社がある。その由緒に、「社号の由来は、天下造りし大神大穴持命が八十神を出雲の青垣山の内に置かじと詔（みことのり）して追ひはらひたまいてから、ここに宮居を定め、国土経営の端緒をお開きになったので、……大神の宮垣の御門とその神戸に因んで御門屋（みとや）と号した」[54]とある。

三屋神社の由緒から、オオナムヂが八十神たちを討伐し、出雲の領内（青垣山）から追い払い、この三屋の地に宮殿をおいて、ここを根拠地として国土開拓を本格的に始めたということである。

神原神社　また、先に紹介した宇能遅神社の１kmほど西に神原（かんばら）神社がある。『出雲国風土記』では、「天下造りし大神が、神御財（かみのみたから）を積み置かれたところである。それで神財郷（かんたからのさと）というべきを誤って神原郷（かんばらのさと）という」[55]と記されている。この神社には「神原古墳」があり、昭和47年に発掘調査したところ、「景初三年」の文字が刻まれた三角縁神獣鏡などが発見された[56]。「神財郷」と称された由縁である。

こうして、スサノヲから生太刀と生弓矢を譲り受けたオオナムヂは、木次・加茂で八十神たちを討伐し、出雲を統一して、まず最初に「御門屋」（『出雲国風土記』では「三刀矢」、現在は三刀屋）に政務のための宮をおき、また神原に財宝の倉庫を設置して、このあたり一帯（三刀屋・木次・加茂）を根拠地にして国土経営を始めたのである。そして、オオナムヂは出雲国の第２代の王となり、「大国主」となったのである。

そして、出雲の王として大国主が最初に行ったことは、まず出雲国内の整備・統治であった。その後、播磨国、越国、信濃、大和、筑紫、讃岐国、伊予国などに進出し、国土開拓に一生を捧げた、というのが私の（今のところの）理解である。

《注》

1）『古事記』（上）、次田真幸全訳注、講談社学術文庫、1977、105頁。

2）『日本書紀』（上）、宇治谷孟全訳注、講談社学術文庫、1988年、47頁、48頁。

3）『古事記』（上）、105頁。

4）『出雲国風土記』、萩原千鶴全訳注、講談社学術文庫、1999年、33-36頁。

5）岡本雅享は、渡来あるいは移住による文化の伝播や交流の比喩が「国引き」神話の趣旨ではないか、と述べている。岡本雅享『越境する出雲学～浮かび上がるもうひとつの日本』、筑摩書房、2022年、68頁以下。

6）『日本書紀』（上）、50頁。

7）（Web）「重蔵神社ホームページ」、御由緒―重蔵神社（juzo.or.jp）。（Web）「Wiki pedia～重蔵神社」、重蔵神社―Wikipedia。

8）『出雲国風土記』の多根郷の条に、「天下造らしし大神、大穴持命と須久奈比古（すくなひこ）が天下をお巡りになったときに、稲種をここに落とされた。だから、種（たね）という」とある。それゆえに、多根神社に大己貴命と少彦名命が祀られている。

9）虫野神社の由緒によれば、「昔は虫原村（現、福原町）に悪虫が 住みつき田圃に害を与えたため、大穴貴命

が大変心配し長らくこの土地に留まってその害虫を駆除した。その功績を尊び神徳を仰ぎこの地に奉斎した」とある。虫野神社―神社詳細 | 島根県神社庁（shimane-jinjacho.or.jp）

10）佐比売山神社の由緒によれば、「大国主命が、国工経営のときに、佐比売山々麓に池を穿ち、田畑を開き、農事を起こし、民に鋤鍬（すきくわ）の道を教え授けられたので、その徳を仰ぎ、この里に神籬（ひもろぎ）を立て祭ったものである。依って里の名を多根と言うと伝えり」。虫野神社 - 神社詳細 | 島根県神社庁（shimane-jinjacho.or.jp）

11）『古事記』（上）、122 頁。

12）西郷信綱『古事記の世界』、岩波新書、1967 年、10-101 頁。鳥越憲三郎『出雲神話の誕生』、講談社学術文庫、2006 年、198 頁。瀧音能之『「 出雲 」からたどる古代日本の謎』、青春新書、2003 年、50-53 頁。

13）森浩一『日本神話の考古学』、朝日文庫、1999 年、124 頁。

14）大物主は「大国主の幸魂奇魂（さちみたまくしみたま）」（『日本書紀』）とされ、大和の支配者であり、今は「三輪山」に祀られている。『日本書紀』の記述によって、あたかも大国主と同一の神とされることが多い。私は、「大物主」を大国主とは別人格の神だと考えている。おそらく、大物主はスサノヲの子孫か、あるいは大国主の御子神（娘婿の神ということもある）ではないかと推測している。いずれにしても、大国主と同世代か、大国主よりも少し若い、弟的な存在ではないかと推測している。

15）富神社（島根県出雲市斐川町富村 596）。社伝によると、「出雲国風土記、国引き神話において、八束水臣津野命が出雲郡の神名火山（かんなびやま）（仏経山）の山上に立ち、国引きを思いつかれて、その大事を成しとげられた後、神門水海に近いこの豊かな土地に鎮座し、出雲社とした」とある。主祭神は、スサノヲの４世の孫神（大国主の祖父神）「八束水臣津野命」と、大国主命の親神「天之冬衣命」となっている。「富神社（出雲市斐川町富村）―shrine-heritager（shrineheritager.com）

16）岡本雅享『越境する出雲学』、41 頁。三浦佑之『風土記の世界』、岩波新書、2016 年、127-132 頁。

17）『古事記』（上）、108-112 頁。

18）三浦佑之『「海の民」の日本神話～古代ヤポネシア表通りをゆく』、新潮選書、2021 年、71 頁。次田真幸訳『古事記』、112-113 頁。

19）宇佐公康『古伝が語る古代史～宇佐家伝承』、木耳社、1990 年。

20）宇佐公康『古伝が語る古代史』、96-98 頁。

21）宇佐公康『古伝が語る古代史』、147-153 頁。

22）宇佐公康『古伝が語る古代史』、154-155 頁

23）（Web）「玄松子の記憶」～「賣沼神社」、売沼神社 賣沼神社（鳥取市）（genbu.net）。

24）（Web）「鳥取市ホームページ」～「八上姫の里」、八上姫の里｜鳥取市（tottori.lg. jp）。

25）『古事記』（上）、113-116 頁。

26）（Web）「南部町～赤猪岩神社」、赤猪岩神社 | 古事記編纂 1300 年 大国主再生の地 赤猪岩神社・清水井ガイド（town.nanbu.tottori.jp）。

27）この後、蘇ったオオナムヂは、岡山県との県境に近い大倉山南麓の上石見（かみいわみ）（現在の鳥取県日野郡日南町）に逃れて、八上姫とともに隠れて住んだという伝承がある。（Web）「大石見神社」大国主命と大石見神社（xn--u9jta474uoyc71cky0m6xj.jp）。

28）『古事記』（上）、114 頁、115-116 頁。

29）「雑感･出雲神話と出雲の国（１）」、『鳥取看護大学･鳥取短期大学グローカルセンター年報第５号』、2022 年、所収、７-８頁。

30）『日本書紀』（上）、50 頁。

31）『日本書紀』（上）、51 頁。

32）（Web）「玄松子の記憶」～「伊太祁曽神社」、伊太祁曽神社 伊太祁曾神社（genbu.net）。

33）本居宣長『古事記伝』（三）、岩波文庫、1942 年、85 頁。

34）（Web）「和歌山県神社庁～國主神社」、和歌山県神社庁―國主神社 くぬすじんじゃ―（wakayama-jinjacho.or.jp）。

35）（Web）「和歌山県神社庁～大國主神社」、和歌山県神社庁―大國主神社 おおくにぬしじんじゃ―（wakaya-ma-jinjacho.or.jp）。
36）（Web）「Flood Maps on your Web-Site」（http://blog.firetree.net/2007/02/06/ flood-maps-on-your-web-site/）。Flood Maps の海抜を５m に設定した地図である。弥生時代の海岸線を推測している。
37）門脇禎二『出雲の古代史』、NHK ブックス、1976 年、40-42 頁。
38）（Web）「鞆の浦研究室～Discovery！鞆の浦」、渡守神社 | 鞆の浦二千年の歴史を紐解く“鞆の浦研究室”／Discovery! 鞆の浦（ameblo.jp）。
39）（Web）「甲奴町観光協会・てくてく甲奴～須佐神社御由緒」、須佐神社御由緒―甲奴がわかる情報サイト てくてくこうぬ（kounu.jp）。
40）『古事記』（上）、114 頁、116 頁。
41）『古事記』（上）、117-118 頁、120 頁。
42）ちなみに、「根の堅州国」は『古事記』の表現であり、『日本書紀』は一貫して「根の国」という。
「根の国」とは黄泉の世界（あの世・異界・幽界）のことをいう。同じく黄泉の世界を表す語として「常世」がある。「常世」が水平的な（海の彼方・山の彼方にある）異界であるのに対して、「根の国」はあきらかに垂直的な地下の異界を暗示している。
43）『日本書紀』（上）、51 頁。
44）本居宣長『古事記伝』（三）、86 頁。本居宣長は次のように述べている。「熊成（くまなす）の峯（みね）は、すなわち熊野（くまぬ）なるべし。「なす」を切（つづむ）れば「ぬ」なり。」「くまなす」を縮めれば「くまぬ」となるのだから。「熊成」は紀伊の「熊野」のことだと、本居宣長は主張している。
松前健は『日本の神々』（講談社学術文庫、2016 年）のなかで、スサノヲの原郷は紀伊だと主張している。「スサノヲの崇拝の真の原郷は、けっして出雲の須佐ではなく、……実は紀伊の須佐なのだということである。この神は古く紀伊の須佐付近の漁民、紀伊海人の信奉していた海洋的な神なのであった。」（87 頁）そして、松前健は本居宣長にならって「出雲原郷説」を否定する。「本居宣長なども、つとにこれに気づいていたが、宮地直一氏などは、『出雲人が太古紀伊半島に移住した』という『出雲原郷説』を唱えたが、私は、これに対して、逆に『紀伊海人が瀬戸内海をまわり、出雲に移住し、熊野大神や素尊などの崇拝を映したのである』と考えたのである。」（93 頁）
45）「雑感・出雲神話と出雲の国（１）」、『鳥取看護大学・鳥取短期大学グローカルセンター年報第５号』所収、6-7 頁。
46）（Web）「玄松子の記憶」～「来阪神社」、来阪神社（genbu.net）。由緒に、「当鼻高山は、宇迦山の主峰にして、古来熊成山と称して居る」とある。
47）（Web）「出雲観光協会～日御碕神社」、日御碕神社｜出雲観光ガイド【出雲観光協会公式ホームページ】（izumo-kankou.gr.jp）。
48）『古事記』（上）、118-119 頁、120-122 頁。
49）『出雲国風土記』、304-305 頁。
50）（Web）「玄松子の記憶」～「来次神社」、来次神社 來次神社（genbu.net）。
51）『出雲国風土記』、291-292 頁。
52）（Web）「shrine-heritager～宇能遅神社」、「祭事も多くは止みしが、弓掛松とて老樹あり。古老伝に曰く、風土記和名鈔に屋裏郷は、天下造りし大神、矢を令立給う。故に矢内と言う。神亀３年字を屋裏と改む。」宇能遅神社（雲南市加茂町）―shrine-heritager（shrineheritager.com）。
53）（Web）「古事記と出雲」～「大国主 56」、古事記と出雲 56　大国主命㉑～八十神討伐にまつわる地名　加茂神社（屋代神社）・屋裏八幡宮～（anahita-style. com）
54）（Web）「玄松子の記憶」～「三屋神社」、三屋神社（genbu.net）。
55）『出雲国風土記』、290 頁、292 頁。
56）（Web）「雲南市ホームページ」～「神原神社」、神原神社古墳 | 雲南市ホームページ（city.unnan.shimane.jp）。